戦争体験

高野　富美子

昭和五年、私は朝鮮の京城（現在のソウル）で生まれました。現在も海外進出は目覚ましいものですが、当時は日本も海外に植民地を多く持っていたようです。

父は国鉄の食堂車勤務のコックだったのです。支那や満州の方まで日本の国鉄は走っていたのです。その頃は、官舎に住み、寮の管理、賄いをしたりで、父も母も忙しく働き、大陸の広々とした空気の中で育ちました。

当時、京城は朝鮮の中心地だったので、アメリカ、イギリス、中国、満州などあらゆる国の人たちが住んでいました。やはり日本人がいちばん強く、私たちも日本人学校に通い、校門を入ると、まず奉安殿に最敬礼して通学したものでした。

だんだん戦時色が濃くなってきて、日本陸軍の兵隊の横暴が目に余るものになってきました。人の命を何と思っていたのでしょう。昔も今も、命を何とも思わず捨てる人も多くいますが、当時も変わりなく、尊く若い生命を射殺したり、処刑したり、むごい傾向が多くあったようです。

日本国内でも食料は不足し、女性は軍人や軍属の慰めものとして扱われるようになったのです。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争へ突入。今まで、幸せに暮らしていた私たちはどうすればいいのか戸惑いました。仲良くしていた友人、知人と別れ別れになり、それぞれ日本国内に帰ることになったのです。家や土地を持っていた人はそれぞれ未練もあり、そのままとどまったり、いろいろな人生だったと思います。私は、何も持っていなかった両親とともに帰国することができ、戦争孤児にならずにすみました。

着の身着のまま、関釜連絡船に乗り、生まれて初めて日本本土の汽車の旅をしました。大きな大陸で育った私の第一印象は、何とせせこましい国だと感じました。そして父の仕事の関係上、東京に住むことになり、弟と両親の四人家族での生活が始ま